

唯物論哲学

記者時代からお教えいただいた先生が、次々と亡くなっていく。

この三月にお別れた哲学者・古田光さんは、横浜国立大学などで教壇に立つ傍ら、唯物論研究協会の委員長も務めた方である。東西の無神論を幅広く研究し、晩年には「レオナルド・ダヴィンチ論」を書いておられたが、それも未完に終わってしまった。八十二歳だった。

進歩的な立場でありながら、党派にこだわらず、後輩の研究者に優しい人だった。二カ月に一度、東京・三鷹のご自宅で開かれるゼミナールに私も参加していたのだが、宗教に

南無
善財

すがわらのぶお
菅原伸郎

東京医療保健大学教授

はつねに温かい関心を示していた。

著『河上肇』（東京大学出版会）を出した一九五九年ごろからの、変わらない姿勢だったろう。

その河上肇とは、戦前のマルクス経済学者である。史的唯物論を「科学的真理」としていたが、その一方で「宗教的真理」の大切さも認めていた。治安維持法で投獄されていたころに書いた「獄中贅語」（中央公論社『日本の名著』第四十九巻所収）には、親鸞の影響を思わせるこ

んな言葉が並んでいる。

《人ありてこれを獲得するとき、そこにはたちまち暗黒の雲霧が開けて限りなき光明が輝き出す。そこには大いなる平安（いわゆる安心）^{あんしん}と大なる歓喜（いわゆる踊躍歡喜の心）が生まれる……》

こうした文章について、マルキストの多くは戦中も戦後も「河上先生も獄中生活で気弱になっていた」などとしか見ていなかった。しかし、三十四歳だった古田さんは深く読み込んでいく。マルクス主義や合理精神を基本にしながらも、背景に「回心」といった宗教体験があったことを指摘していく。進歩的イデオロギーが全盛だった時代にしては、大胆な見方だったのではないか。

「唯物論者」といっても、私がお目にかかった方だけでも、その思想はさまざまである。たとえば、一九九〇年に亡くなった古在由重さんはかげりがなく、人類の未来を心の底から信じておられた。旧制一高の陸上部員だった人らしく、あくまで健康で、私にはまぶしくさえ見えた。没後に蔵書一覧を拜見する機会があったが、ツルゲーネフやトルストイの原書はあっても、ドストエフスキーはほとんどなかった。

古田さんの場合は、仏教や西田哲学への関心という点で違っていた。京都大学で学び、下村寅太郎や務台理作に師事したせいだろうか。素直に「科学的真理」が信じられなかったのか。あるいは、若いころの絶望

がどこかに隠されていたのか。やはり遺品の蔵書を見せていただいた感じでは、河上や三木清と違って、親鸞の罪悪感情よりも禅思想に関心があつたようだ。先の『河上肇』の「あとがき」にはこうあつた。

《思想史に興味を持つ一哲学徒であつて、経済学にも、共産党にも直接の関係をもっていない。——そういう私が、なぜこのいささか古めかしい「マルクス学者」に関心をいだき、あえて自分なりの「河上肇論」を書いてみようと思つたのか。それ

は、つきつめて言えば、「自分自身のために」ということに帰着する》

仏教は無神論とも唯物論とも言えるのだから、もともと関心があつて当然だったろう。といつて、手放しに礼讃したのではない。「大乘仏教は本来、個人の救いだけではいけない、という反省から生まれたはずなのに、実際はそうなつてませんね」とも話していた。私が一九九七年に担当した朝日新聞の対談では、南山大学のヤン・ヴァン・ブラフト神父にこう述べている。

「仏教の慈悲には、社会的活動への積極性が乏しいわけではありませんか。逆に、マルクス主義者の社会的実践は従来、慈悲や愛に欠ける面があつたように思います」

